

あなたにできること、きっとある。

もっと知りたい、「里親」のこと

こどもを迎え入れるまでの4ステップ

STEP1

相談

児童相談所や里親支援機関に相談を。里親の条件や手続きなどを説明します。



STEP2

研修・家庭訪問

児童養護施設や乳児院などでの実習を含む数日間の研修と、家庭環境の調査があります。



STEP3

登録

都道府県等の審査を経て、里親として登録されます。



STEP4

交流

面会や数時間の外出、宿泊などで、こどもと一緒に過ごします。



こどもを家庭に迎え入れる

養育に必要な費用が支給されます

こどもを育てるために必要な生活費、教育費、医療費などが支給されるので、安心して養育できます。

里親手当
1人あたり

9万円／月

※養育里親の場合。

生活費

乳児

約6万円／月

乳児以外

約5万2千円／月

※その他、教育費や医療費、防災対策費なども支給されます。

里親Q&A

Q

特別な資格が必要なの？

A

所定の研修を受け、こどもに適した住環境があるなどの要件を満たしていれば、特別な資格は必要ありません。保護を必要とするこどもに寄り添い、あたたかい愛情と正しい理解をもって接することができれば大丈夫です。

Q

共働きでも大丈夫？

A

基本的に問題ありません。ただし、こどもの養育に支障がでる場合は調整が必要なこともあります。

Q

実子がいても里親になれる？

A

なれます。実のこどもに里親になることを伝え、理解を得たうえで、新しい家族を迎えるのが理想です。実のこどもの年齢や性別を考慮して、委託することも決めることもあります。

里親制度について知りたい

朝日新聞デジタルサイト

広げよう「里親」の輪

<https://globe.asahi.com/globe/extra/satooyanowa/index.html>



里親になりたい

お近くの児童相談所にお問い合わせください。

児童相談所

【相談専用ダイヤル】

0120-

いち は や く お な や み を

1 8 9 7 8 3

里親制度について知りたい

里親制度について知りたい方はQRコードで特設サイトへ～里親制度の疑問に答えています～

朝日新聞デジタルサイト 広げよう「里親」の輪

<https://globe.asahi.com/globe/extra/satooyanowa/index.html>



里親になりたい

お近くの児童相談所にお問い合わせください。

児童相談所

【相談専用ダイヤル】

0120-

いち は や く お な や み を

1 8 9 7 8 3

【インターネット】

全国児童相談所一覧



こども家庭庁
里親制度



全国里親会



日本ファミリーホーム
協議会



児童相談所一覧

いま、あなたを待っているこどもたちがいます。

「いつか」を

「いま」に。

いま、里親になろう！

それぞれの事情で親と離れて暮らすこどもたち。

日本には約4万2千人います。

そうしたこどもを自分の家庭に迎え入れ、

必要な生活費や養育に関する相談など、

さまざまなサポートを受けながら育てるのが

「里親制度」です。



こどもまんなか
こども家庭庁

「里親」STORY

「うちの仲間にならない？」 寂しかった心に、里親の言葉が響いた

小賀坂小春さん

生後まもないころから過ごしていた乳児院で、齋藤直巨(なおみ)さん(※以下、なおさん)、竜(りょう)さん夫婦と出会いました。「もし仲間になってもいいなと思ったら教えてね!」。3歳の小春さんは「わたし、仲間になる!」と決めました。

2人の姉も受け入れてくれ、うれしい反面、不安も。「こんなに楽しい家族の中に自分がいてもいいのかな、本当に愛してくれているのかな」

愛情を試すような言動を繰り返し、小学4年生の時に家出をします。「習い事に行くときに持たせてもらった“もしものとき”用のお金を使い果たし、なおさんに叱られたんです。許してもらえたのですが、『本当に許してもらえたのか?』って。姉とのケンカもあり、家出してしまいました」

友達の家を訪ねたところを保護され、「『あんた、どこ行ってたの!』と涙を流して叱るなおさんから、姉たちも心配して探していたと聞き、ものすごく反省しました。家出をきっかけに、自分はこんなに大切にされているんだと思い、家族を試すような言動も減っていったと思います」

一昨年、実親と面会しました。「実家族は仲も良く、どうして自分は一緒にいられなかったんだろうとモヤモヤしましたが、『モヤモヤもネガティブな気持ちも全部小春の大事な気持ちだから、そのままでもいいんだよ』となおさんたちは受け入れてくれました。家族って血のつながりではないんですよね。自分が安心できる場所に信頼できる仲間がいる、それが家族なんだと思います」

CASE



こがさか・こはる／2006年生まれ、東京都在住。生まれてすぐ乳児院に預けられ、3歳から里親家庭で育つ。2021年に実親と対面し、実名で活動する許可を得る。現在、里親家庭で暮らす委託児童や実子を支援する一般社団法人グローハッピーが主催する「こども会議」のこども委員、ファシリテーターを務める。

野球に打ち込みたくて、気持ちを 尊重してくれた里親家庭へ

池田 累さん

9歳から児童養護施設で暮らしていました。好きな野球に打ち込みたかったものの、共同生活を送る以上、野球だけに集中するのは難しい環境でした。野球を諦めきれず、高校受験を機に「里親家庭で暮らしたい」と懇願したところ、2組の里親が見つかりました。「どちらの里親さんも、気持ちを汲んでくださって本当にありがたかったです。最初の里親さんは1年間だけでしたが、受験という大変な時期を支えてくれました」

高校入学後、新しい里親家庭での生活が始まりました。平日は朝早くから学校へ行き、帰るのは夜9時過ぎ。土日は県外遠征と野球一色の生活でした。看護師だった里母は毎晩、温かい食事を用意してくれました。「先に寝てでもいいのに、作ってくれるんです。お弁当も用意してくれまし、親以

上のことをしてもらいました」

ある日、玄関の明かりを見て、「ここが自分の家なんだ」という感覚になりました。「母は夜勤もあったはずなんですけど、調整してくれていたんじゃないかな。家で迎えてくれる人がいて、とてもうれしかったです」

「父や母が毎日身支度をして仕事に行く姿を間近で見られたのも、すごく大きかったです。こういう風に社会に出ていくんだとイメージできました。2人は人生の先輩です」

特別なことをする必要はなく、いつもの生活の中に迎え入れる感覚でいい。「普通の家庭での過ごし方を知れるとか、社会経験が身につくというのが、こどもから見た里親制度の一番の価値です」

CASE



いけだ・るい／1990年生まれ、神奈川県在住。9歳で児童養護施設に入所、14歳から里親家庭で育つ。高校卒業と同時に独立し、現在は結婚して2児の父。野球に打ち込んだ高校時代を支え、背中を見せてくれた里親夫妻は「人生の先輩」として現在も慕う間柄。

たくさんの人が支えてくれる 里親への一歩、自信をもって踏み出して

平野隼人さん

昨年、夫婦で里親認定を受け、養育里親として短期委託でこどもを預かってきました。「以前から里親になりたいと話していたので、妻も妻の両親も賛成してくれました。こどもがいなかったので、選択肢の一つとして自然な流れでした。結婚後ほどなくして、僕から提案をしました」

2歳頃から養子として今の両親のもとで育ちました。現在でも幼稚園のときに描いた絵が飾られているような家庭です。「両親との血縁や関係をあまり深く考えたことはなかったですね。一緒にご飯を食べて、遊んで、悪いことをすれば怒られて、良いことをすれば褒めてくれた。ごく一般的な家庭でした」

妻は「ご両親が隼人さんを大事に育ててくれたので、血縁がなくてもこどもを育て

られる」と自信を持ったそうです。

児童相談所に相談し、夫婦で座学を受け、乳児院で研修も受けました。先輩里親との交流もあり、2歳半の女の子を預かったときも「何かあったら連絡して」と気遣ってくれました。「それが本当に心強かった」。現在、長期委託に向けて、2歳の女の子とマッチングを始めています。「自分のやりたいことを見つけ、可能性を広げてほしい」

里親が増え、こどもたちの環境がさらに良くなるように。多様性の世の中で里親制度がこどものために普通に存在する社会になるように。それが願いです。

「不安になることは一切ありません。自信をもって里親になってください。児相や先輩里親さんがサポートしてくれます」

CASE



ひらの・はやと／青森県出身。声優・俳優として多くのアニメーションやゲーム、ドラマなどに出演。特技はこどもの頃から習っていた水泳。2022年に夫婦で里親認定を受けた。

短い時間でも、こどもにとっては宝物 佐藤浩市さん・亜矢子さん夫妻が続ける 「フレンドホーム」という繋がり方

佐藤浩市さん 亜矢子さん

乳児院や児童養護施設のこどもたちを週末や休み期間に預かる「フレンドホーム(東京都の制度の名称)」を、5年以上続けています。児童養護施設のこどもたちとふれあうボランティアをやっていた亜矢子さんが、自室に引きこもりがちな女の子がいて知ったことがきっかけでした。「家庭で過ごすことで、少しでも元気になってもらえたら」

女の子は、なかなか普通の声で話すことができませんでしたが、じっくり向き合い、見守ることにしました。「あいさつもできるようになって。笑顔が見られたときには、喜びを感じましたね」(浩市さん)

料理をしたり、花を生けたり。休日と一緒に過ごした後は、施設へ送り届けます。

「お別れするまでの30分間、車中での時間を彼女がとても大事に感じていてくれるというのが伝わってきて、僕もその空気感が好きで。教えてもらったことがいっぱいあったなあと振り返って」(浩市さん)

「週末だけ、お休みのときだけでも、家庭生活を送ることはこどもの未来に変化を起こすと思います。里親制度をぜひ知ってほしいです」(亜矢子さん)

「責任はあるから、背伸びは必要なんです。でも、ずっと背伸びしていたら相手も疲れてしまいますよね。あるとき背伸びをやめてかかとを落としたら、背伸びしていたときと見える景色が同じだったんです。僕がこどもと関われたからなんだと思っています」(浩市さん)

CASE



さとう・こういち／1960年、東京都生まれ。19歳で俳優デビュー。日本アカデミー賞最優秀主演男優賞をはじめ、数々の賞を受賞。さとう・あやこ／舞台女優として活動後、1993年に結婚。2014年より児童養護施設のこどもを支えるボランティアを始める。

